

R2：IR 実務担当者セッションの報告内容の詳細

「自己点検・評価への AI 活用による教学マネジメントと内部質保証の実質化」

田中貴久（立命館大学 教学部教学推進課）

概要：AI を活用した自己点検・評価の高度化に向け、質的な各種根拠資料のナレッジデータベースと IR とデータベース構築の両輪を基盤に、Tableau によるアセスメントの可視化を通じて学部・研究科の PDCA サイクルを実質化する取組を紹介する。業務負担の増大や形骸化といった課題に対し、データ基盤・評価観点・組織文化の整備という観点から、AI 活用の実装条件を整理する。さらに、AI 時代における意思決定主体としての人の役割と必要な思考・能力について考察する。

「IR 基盤データの統合・可視化における、AI 活用事例 —逆向き設計で AI に方向を示す実践報告」

○阪本龍一（札幌大学 企画部 IR 推進室）、荒木俊博（札幌大学 地域共創教育機構 准教授（学長政策室担当部長兼務））

札幌大学の IR 基盤データ（入学・学生・卒業等）は、各担当部署からデータを集め、IR 推進室で整備してきたものである。これらを、個人情報の取り扱いに配慮した上で統合し、「何を見せたいか」という完成形から逆算する「逆向き設計」と同じ考え方をを用いて、生成 AI を活用した可視化を進めている。AI との役割分担を明確にし、専門の IR 人材を持たない小規模大学の事例として紹介したい。

「進学推奨に関連する要素の探索 —多変量解析に不慣れな実務者による AI 活用の試み—」

野上将司（京都産業大学 学長室 IR 推進室）

京都産業大学の卒業時調査では、NPS（Net Promoter Score）を用いて進学推奨意向を測定している。従来の記述統計による把握に加え、今回は AI を活用し、ロジスティック回帰分析・因子分析・パス解析を組み合わせ、進学推奨の関連要素の探索を試みた。

多変量解析にあまり詳しくない報告者が、AI を用いてどのように探索を進め、どのような結果を得たのかを報告する。

「Student Success を支えるデータ活用：米国ミネソタ大学訪問調査と山形大学の実践報告」

矢野智子（山形大学教育推進機構 IE 推進センター 講師）、鈴木達哉（山形大学エンロールメント・マネジメント部教務課 専門員）

報告者は昨夏、米国ミネソタ大学を訪問し、学生支援におけるデータ活用についてヒアリングを行った。同大学では「Student Success」を 4 要素（Academic Success、Sense of Belonging、Well-being、Thriving）で捉え、各種データを早期警告システム（Early Alert System; EAS）等の予防的支援に活用している。本報告では同大学の枠組みと運用体制を紹介するとともに、山形大学で進めている EAS の取り組みを取り上げ、日本の IR 実務への示唆を検討したい。